平成２２年５月３１日現在

研究種目：基盤研究（C）一般
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５３０１７５
研究課題名（和文）　スミス経済学の生物学的・進化論的再構成：自己保存と互恵性の原理

研究課題名（英文）The Biological Reinterpretation of Adam Smith's Economics: Principles of the self-preservation and the Reciprocity

研究代表者
高　哲男（　TAKA TETSUO　）
九州産業大学　大学院経済・ビジネス研究科・教授
研究者番号：９０１０６７９０

研究成果の概要（和文）：アダム・スミスの経済学は理神論的な予定調和の思想やニュートン的な科学の方法に基づいて構築されている、という伝統的な理解は一面的である。スミスの場合、科学方法論の基礎に進化生物学的な共感や種の存続という本能論的・心理学的認識が貫いており、それが、食物のカロリー的効率性や人間が等しくもつ自由の犠牲＝労働という認識に基づく独自の労働価値説や自然価格論を支えていることを、文献的証拠に基づいて明らかにした。スミスは単純な「自由放任」の思想家ではなく、生物学的な意味での種の存続と個人間の互恵性を重視した思想家なのである。

研究成果の概要（英文）：Smith's social theory analyzed and interpreted both unfolding and accumulative structures of human beings and society on the foundation of human instinct. My reinterpretation makes it possible to achieve a coherent understanding of *Moral Sentiments* and *Wealth of Nations*, as well as to recognize the commonality between Hume, Smith and Charles Darwin in respect to the evolutionary point of view. For Smith, human nature incorporates the instincts of self-interest (self-preservation) and mutual altruism (sociability, the propensity for exchange).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想
キーワード：経済理論、経済政策、思想史、自由主義、経済学方法論

１．研究開始当初の背景

新古典派の経済者もネオ・リベラリズムの政治思想もともに自らの「自由主義」を正当化するにあたって、つねにアダム・スミスの思想を「自由放任思想」つまり「市場主義」と特徴付けてきたが、それは基本的に間違っていることを、スミスの方法論の著作、『道徳感情の理論』、『国富論』に基づいて明らかにし、現代の行きすぎた市場主義や自由放任思想に対して、「共感」のもつ役割の重要さを、経済学史・思想史研究の立場から明確にしたいという問題意識を持っている。もちろん、従来の経済学史研究――日本の場合には、マルクスの影響もあって、純粋資本主義モデルか否かとか、投下労働量と支配労働量は一致しないのではないかなどの問題に研究が偏重していたし、海外にあっては、『道徳感情の理論』の理論はもっぱら社会思想家や哲学者によって、『国富論』が経済学者によって注目されるという断絶があったし、結びつける場合には、功利主義の基礎と応用という枠組みのなかで理解されてきた――についても、このような進化生物学＝進化心理学の方法――人間本性の根拠を理性ではなく、感情に求めたうえで、両者の関係を解き明かすこと――をまったく無視してきたという問題があった。それゆえ、今こそスミスの主張に内在した根底的な批判な批判と問題提起が必要だと思われたのである。勿論、近年における進化心理学や進化生物学の発展を織り込んだうえで、どのような経済学が構築できるのかと問いかけた以上、あくまでも抽象的なレベルにとどまるとはいえ、せめて方向性だけでもはっきりさせたいという希望もある。つまり、私的利益の追求はどのような条件があれば、同時に、社会的利益の追求になり、結果的に社会的利益を実現できるようになるのかという問題を、ひとまず原理的な次元で解明しておきたいという希望である。

２．研究の目的

本研究の目的は、アダム・スミスの経済学における「利己心と道徳＝利他心」との間の矛盾、つまり伝統的に「アダム・スミス問題」と呼ばれてきた『国富論』と『道徳感情の理論』と矛盾という問題に対して、「社会性動物」における本能の役割を高く評価する現代の進化生物学とくに進化行動学の研究成果である「互恵性reciprocity」の概念に注目することにより、彼の経済学を統一的な理論体系として再構成し、その現代的意義を明確化することである。

スミスのいう自己愛＝利己心とは彼のいう「個体と種の保存」という本能のことであり、スミスのいう「共感」とは、集団＝社会における個体相互の「互恵性」に他ならず、両者は「交換性向」によって結合されている。したがって、スミスの思想体系を全体として統一的に理解するためには、この体系が、従来指摘されてきたニュートン力学の純粋で抽象的な物理学的方法ではなく、棲み分けや共生という生物多様性原理を保障する生物学的な方法に基づいて組み立てられていることを文献実証的に解明することが不可欠になるが、これはスミス研究だけでなく、グローバリズムのもたらす弊害の根本的解決策を構想する基礎として、重要な手がかりを与えるはずである。

もっとも３年間という限られた期間での作業であるから、あくまでも概要の解明にとどまるではあろうが、初期の方法論文、中期の『道徳感情の理論』(初版 1759～第４版 1774)および『国富論』(初版 1776)、さらに最晩年の『道徳感情の理論』第６版（1790）にいたるスミスの社会思想と経済学の全体を、統一性をもった社会理論体系として再構成し、現代経済学の枠組みと射程を拡張するための具体的な手がかりを確保したい。

３．研究の方法

(1) アダム・スミス文庫に含まれる当時の生物学研究についての調査は、東京大学経済学部、京都大学理学部、早稲田大学、エジンバラ大学、グラズゴー大学、レディング大学などの図書館およびロンドンのリンネ協会において遂行した。狙いは、スミスが読み、影響を受けたことが確実な著作において展開された理論＝説明と、スミス自身が、方法論や『道徳感情の理論』、『国富論』で行った説明との違いや関連性を明確化することを通じて、スミス独自の思想や方法をえぐり出す手がかりを入手することにある。

リンネやビュフォンについてはほぼ必要な部分の調査を終えたし、スミスの友人 J. ハットンの『農業論』や『地球の理論』、18 世紀におけるイギリス農業におけるさまざまな生産方法の改良について、その輪郭だけは分かってきた。

(2) 当時の生物学研究、および、進化心理学的研究のなかで、なぜ、スミスのそれが「突出していたか」を当時の他の著作と較べながら調査した。

確たる結論を得ることはできなかったが、スミス独自の科学方法論と現代の進化生物学の方法とは、基本的に矛盾するところがない、という点だけははっきりと確認できた。

(3) イギリスにおける心理学の発展、功利主義哲学の発展と展開のプロセスのなかで、スミスの『道徳感情の理論』を捉えなおし、そのもつ現代的意義を確認する。

すでに手がかりはつかんだので、現在それを具体化する作業に取りかかっている。
(4) 欧米の経済思想史学会で発表し、我が国における思想史・学説史研究の国際化をいっそう進展する。

４．研究成果

(1) スミスの労働価値論を支える労働＝自由の犠牲説と維持しうる労働＝カロリーで計った栄養の量という二つの要因の内、後者については、スミスの時代、まだ彼が指摘した「ジャガイモとトウモロコシ」はイギリスでは本格的に栽培されていなかったことが分かってきた。したがって、「新大陸の発見がヨーロッパにもたらした最大の贈り物はジャガイモとトウモロコシである」というスミスの主張は、少なくともイギリスに関するかぎり、「結果的な判断」に基づくというよりも、「理論的」な予測である可能性が強いことが判明してきた。
(2) 上述の作業を遂行するなかで、スミスが『国富論』で指摘した「ピン工場」における分業例について、面白い発見をした。つまり、スミスがいう「ピン」とはまさに洋服をつくるときのピンであり、高価なボタン代わりに服を留めるピンであり、髪の毛をとめるピンであって、当時のイングランドならどの都市であれ、必ず小さなピン製造工場があって、大概多くの児童労働の上に成り立っていた、という事実である。
(3) 『国富論』における分業論の前提である「交換性向」は、『国富論』では、「人間本性がもつ本源的な原動力」なのか、理性や言語の産物なのか、いずれとも決めがたいと説明されていたが、『道徳感情の理論』第 6 版の増補箇所で、「言語は感情、共感を基礎にして初めて成立しうる」と追加されたことから分かるように、最終的にスミスは、交換性向も人間に特有な本能であると判断するにいたった。つまり、利己心だけが本能ではなく、共感つまり互恵的利己心もまた本能だ、という理解である。したがって、スミスの経済・社会思想は、単純な「利己心の体系」と捉えることはできず、基本的に「共感の体系」であると捉えなければならない、ということになる。
(4) スミスの科学方法論は、独自の理神論的世界観という基礎にヒュームの功利主義的人間解釈を追加し、ニュートン的な演繹的方法に基づいて展開されたものだ、という伝統的な理解は、外部感覚論をはじめ、初期の方法に関する論文の立ち入った健闘により、不十分な理解であることが分かった。スミスは、徹底した経験論者だが、直接原因と究極原因とを関連づける中間原因は、科学の発展(観察の社会的・歴史的蓄積)により無限に、限りなく発見され、積み上げられながら厳密化＝複雑化し続ける、と理解していた。つまり、まだ生物学も、進化論も未発展にとどまっていた啓蒙期になされたスミスの主張が、現代でもなお大筋において多くの科学的観察と大きな矛盾をきたさない基本的な理由は、目的因(究極原因)を種の存続に限定したうえで、直接原因を「経験と観察により限りなく多様に、しかも精密化されうる中間原理の集合である」と捉えた進化論的な科学認識そのものにあったわけである。
(5) 現在論文にまとめつつあることだが、スミスは人間本性――動物として他の動物と共有しつつ、なお人間が独自にもつ特質――を、あくまでも「個人が行う社会的行為の適切さ」を判断する人間の感情にもとめ、それに基づいて言語や理性が登場する、と理解していた。だが、おそらくは宗教界からの批判を回避するために、理神論的枠組みを利用しつつ定式化された「究極原因」と「直接原因」の関係は、第 6 版にいたると、神学的装いを脱ぎさった「自然」そのものと「直接原因」とによって代置された（厳密に言えば、第 4 版 (1774) で示唆されるようになったのだが)。重要なことは、『道徳感情の理論』は、そもそもそのような「置き換え」が可能になるような理論構造になっていた、という事実にあるのだが。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

①<u>高　哲男</u>　アダム・スミスにおける本能の概念化と経済学の生物学的基礎　（査読無、招待論文）　『商経論叢』第 43 巻第 1 号、平成 2008 年 5 月 31 日　　113-153 頁。

〔学会発表〕（計　１件）

①<u>Tetsuo Taka</u>, “Instinct as a Foundational Concept in Adam Smith’s Social Theory.” Smith in Glasgow ’09 at University of Glasgow Adam Smith Research Foundation, 31 March-2 April 2009.

〔図書〕（計　１件）

①翻訳：Frank F. Knight『競争の倫理』　ミネルヴァ書房　（黒木亮と共訳、281 頁）2009.5.30.

６．研究組織
(1)研究代表者: 高　哲男
九州産業大学・大学院経済・ビジネス研
究科・教授
研究者番号：９０１０６７９０